

Tsuchitter

~つちうらを フォロってファボって リツイート~

2013 年度都市計画マスタープラン実習 班レポート

2014 年 2 月 7 日(金)

1 班

班長：山根優生
石村匠
富田真紀

副班長：瀬島由実加
井下純貴

TA：岩片麻実

目次

1	土浦市の概要	5
2	土浦市の現状	6
2-1	人口	6
2-2	農林水産業	7
2-3	工業	8
2-4	商業	8
2-5	交通	9
2-6	観光	9
2-7	医療・福祉	10
2-8	教育	10
3	マスタープランの構想	11
3-1	将来の人口フレーム	11
3-2	土浦市の将来像	11
3-3	コンセプト	11
4	重点整備計画	12
4-1	教育 ～愛つちうら育育計画～.....	12
4-1-1	現状	12
4-1-2	提案	12
4-2	観光 ～ちゃりんこつちうら！～.....	14
4-2-1	現状	14
4-2-2	提案	14
4-3	子育て ～常磐線すくすくエリア計画～.....	16
4-3-1	現状	16
4-3-2	提案	16
4-4	にぎわい ～土浦まんなか復活大作戦～.....	19
4-4-1	現状	19
4-4-2	提案	19
4-5	広報 ～ビビッと魅力発信！～	24
4-5-1	現状	24
4-5-2	提案	24
5	その他の計画	25
5-1	チャレンジエリア計画	25
5-1-1	現状	25
5-1-2	提案	25
5-2	医療エリア計画.....	26

5-2-1 現状	26
5-2-2 提案	26
6 まとめ	28
7 謝辞	29
8 参考文献	30
9 資料	31
9-1 ヒアリング調査概要	31
9-2 企画書	32
9-2-1 愛つちうら育育計画	32
9-2-2 観光	34
9-2-3 子育て	39
9-2-4 チャレンジ	42
9-2-5 医療	44
9-2-6 にぎわい	46
9-2-7 広報	50

図表リスト

図 2.1: 土浦市の人口推計	6
図 2.2: 土浦市の農家人口推移	7
図 2.3: 霞ヶ浦における漁獲量推移	7
図 2.4: 土浦市周辺の大型店舗立地	8
図 2.5: 土浦市 月別観光客数(平成 24 年)	9
図 3.1: コンセプト概念図	11
図 4.1: 広報つちうら購読率	12
図 4.2: 教育プログラム概要イメージ	13
図 4.3: 水郷筑波サイクリングコース完成予想地図	14
図 4.4: 水郷筑波サイクリングコース完成予想地図	15
図 4.5: すくすくサロン@さんばる 設置予定図(さんばる 2 階空き店舗)	16
図 4.6: すくすくコミュニケーションルーム イメージ図	17
図 4.7: 子育てほっとカフェ イメージ図	17
図 4.8: 土浦市内の放課後子ども教室実施校地図	18
図 4.9 : 中心市街地全体計画図	19
図 4.10: まちなか交流ステーションほっと One+イメージ	20
図 4.11: 商業施設断面イメージ	21
図 4.12: ながら交流イメージ図	21
図 4.13: 新図書館内イメージ図	22
図 4.14: 公園イメージ	23
図 4.15: かまどベンチ	23
図 5.1: 駅前神立マップ看板完成予想図	25
図 5.2: 医住近接計画完成予想図	27
図 6.1: 土浦市地域別構想	28
表 4.1: 教育プログラムの体系	13
表 8.1: ヒアリング調査概要	31

1 土浦市の概要

土浦市は茨城県南部に位置する都市であり、東京から 60 km 圏内に位置している。常磐高速道路や JR 常磐線が市を縦貫しており、東京都市圏を構成する都市として、また東京圏と東北圏間の拠点として重要な役割を果たしている。また成田国際空港から約 40 km 圏内に位置し、茨城空港にも近接。空の窓口とも好アクセスである。

平成 18 年 2 月、新治村との合併により市域は面積 122.99 km² となり、平成 25 年 9 月現在 142,617 人が暮らしている。水と緑に恵まれた都市であり、国定公園である筑波山麓や日本第 2 位の面積を誇る霞ヶ浦、桜川などの河川を有するなど、自然資源にあふれている。これら大自然の懷では農業も盛んであり、霞ヶ浦周辺に広がる蓮畑で生産されるレンコンの生産額は日本一である。一方で立地の良さから工業も発達。神立地域を始め、市内にはいくつかの工業団地を有している。土浦は江戸時代に土浦城の城下町として発展し、霞ヶ浦水運や水戸街道の陸上交通の拠点として栄えた。隣接するつくば市研究学園都市の開発や 2005 年のつくばエクスプレス開業により地域での求心力が低下し、近年は人口減少などに悩まされている。2013 年末にはつくば市との合併協議に合意。茨城県南地域の更なる再編の兆しを見せている。

2 土浦市の現状

2-1 人口

土浦市の人口は2010年に新治村と合併したことで大幅に増加したが、それ以降は減少傾向にある。コーホート要因法によると図2.1のように今後も生産年齢人口割合は減少し、高齢者割合は増加していくことが予測される。約20年後の2035年予測人口は12.2万人である。

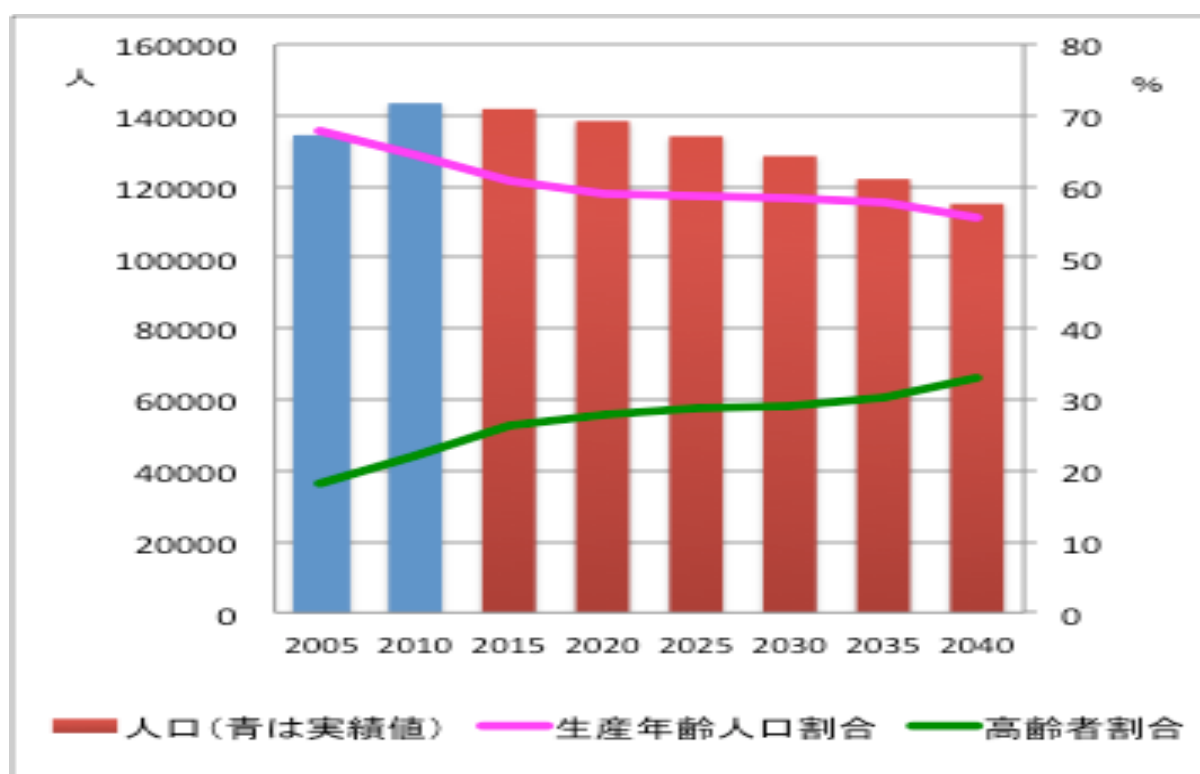


図 2.1：土浦市の人口推計

2-2 農林水産業

土浦市は、地形、気象条件、交通網の発達、首都圏大消費地に近いという恵まれた立地条件のため、茨城県内でも農業が盛んな地域である。平成 18 年度茨城農林水産統計年報より、農業出荷額は 96 億 8000 万円と多く、その内訳としては米 14.5%、野菜 45.6%、花卉 9.9%、果実 7.7%、畜産類 19.1%、その他 3.2%となっている。またレンコンの生産量は全国第 1 位で、れんこん麺、れんこんサブレなどれんこんの加工品も製造されている。図 2.2 のデータによれば平成 17 年から平成 22 年の間に農家数・農家人口共に増加したように見えるが、平成 18 年の新治村との合併によるもので、全体の流れとしては減少傾向にある。

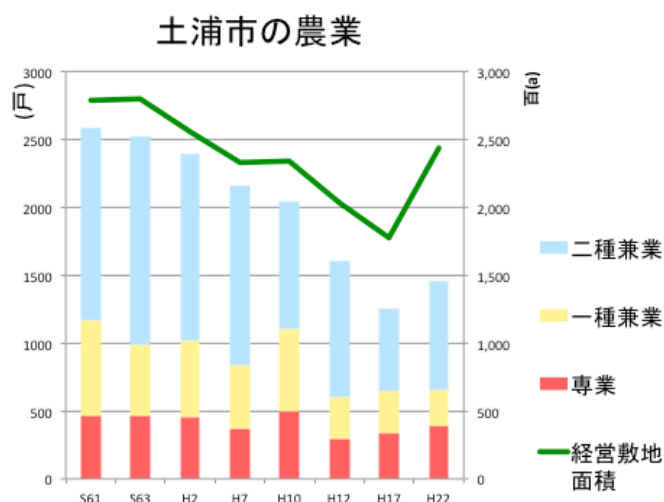


図 2.2：土浦市の農家人口推移

図 2.3 は霞ヶ浦における漁獲量推移を示したものである。霞ヶ浦においては昔からエビやハゼ類、うなぎなど漁業が盛んであったが、近年は水質の悪化や生態系の変化などの影響により漁獲量が減少傾向にある。2003 年にはコイヘルペスウイルスの流行により養殖鯉の大量死が発生。鯉の養殖といった特徴ある景観が消えてしまったという例もある。

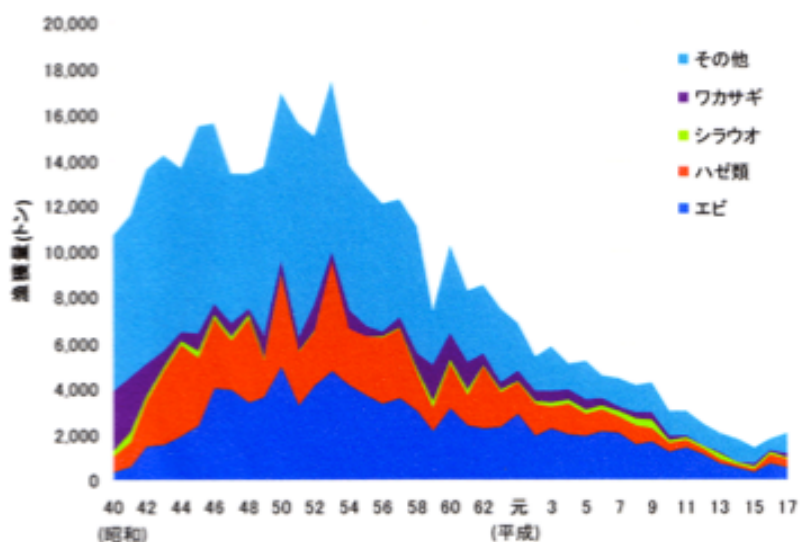


図 2.3：霞ヶ浦における漁獲量推移

2-3 工業

市北部に工業集積地が位置し、市内には神立の土浦・千代田工業団地、テクノパーク土浦北、東筑波新治工業団地、おおつ野ヒルズの4つの工業団地がある。首都東京から約60km圏内という好立地にあり、交通の便も良く、神立以外の3カ所では奨励金交付制度を設けることにより企業誘致を行なっている。ただし、土浦おおつ野ヒルズ工業団地については未利用率が86%と大部分が未利用のままである。土浦市全体としては、2009年の製造品出荷額等がリーマンショックの影響もあり大幅に減少したものの、翌年には製造品出荷額、従業員数ともに増加している。

2-4 商業

図2.4は土浦市とその周辺の大規模店舗の立地分布を示したものである。「イオンモール土浦」をはじめ、つくば市の「iiasつくば」、阿見町の「阿見アウトレット」など郊外型ショッピングセンターが近隣に数多く立地していることが読み取れる。これらの影響もあり、土浦市の中心市街地の商業は年々衰退している。また中心市街地商店街では店主の高齢化によりシャッターを閉める店舗や空き店舗が増加。モール505についても空き店舗が増加し魅力的とは言えない状況である。また、平成27年には土浦市庁舎が土浦駅前の再開発ビルURALAへの移転が決定している。小網屋や京成百貨店が店を開き茨城県南の中心として商業の栄華を極めた時代はなりを潜め、さらに中心市街地の商業の衰退が加速することが考えられる。



図 2.4 : 土浦市周辺の大規模店舗立地

2-5 交通

土浦市の道路については特に国道 6 号が重要幹線道路である。この路線は交通量の増加に伴い、慢性的な渋滞が起こっている。また、国道 6 号と平行して常磐自動車道も縦貫しており、市内には桜土浦、土浦北の 2 つのインターチェンジがある。首都圏中央自動車道も土浦市のすぐ南を横断しており、平成 27 年の全線開通後はその恩恵をうけることが予想される。

鉄道については JR 常磐線荒川沖駅(8,451 人/日)、土浦駅(16,233 人/日)、神立駅(5,475 人/日)があり、これら 3 駅の利用者数はそれぞれ緩やかに減少している。これらは TX の開通や土浦市の人口減少が関係していると考えられる。一方で 2015 年春には東北中感染として常磐線が東京駅まで乗り入れるため、常磐線沿線はベッドタウンとして人気が高まることも予想される。

バスについては路線バスとまちづくり活性化バス「キララちゃん」が運行。路線バスは市内に数多くのバス停を設置しているが、平日 1 日あたり片道 200 本を超えるバスが停車するバス停がある一方、1 日数回しかバスの来ないバス停もある。また路線バスの利用者は減少傾向にあり、廃止になった路線も多々ある。一方で市内の NPO 法人が運行している「キララちゃんバス」は中心市街地活性化を目的として運行している。また地元住民が運行経費を一部負担するコミュニティバス「新治バス」も運行されているほか、「のりあいタクシー土浦」という、指定場所から指定場所まで送るサービスも行っている。また高速バスも運行しており、成田空港や大阪京都、水戸等への路線が運行されている。

2-6 観光

江戸時代より水戸街道と水運の拠点のある城下町・宿場町として栄えた土浦市街は土浦城址やまちなか蔵周辺の歴史的町並みや小野小町伝説などの歴史資源、霞ヶ浦や筑波山南麓などの自然資源、工場見学など産業資源が存在する。また、秋田・新潟と並び全国屈指の花火競技大会が開催され毎年 70 万人もの来訪者があるのを始め、流鏝馬まつり、からかさ万灯など歴史ある祭事が開催されるほか、カレーフェスティバルや雛まつりも新たな行事として注目されつつある。このように土浦市はイベント観光が盛んな都市であるため、図 2.5 に示す通り、観光客数の現状は 4 月の桜まつり、8 月のキララまつり、10 月の花火競技大会開催時の入り込み数は大きいもののそれ以外では 3 万人前後で推移している、またそのほとんどが日帰りである(H17 年度で 7.3%、約 10 万人)。

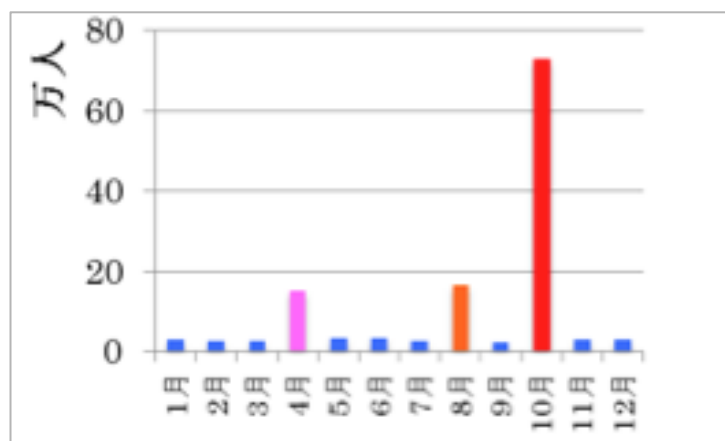


図 2.5 : 土浦市 月別観光客数(平成 24 年)

2-7 医療・福祉

一般診療所を含めた病院は市全域にあり、中心市街地など人口の多いところに多く分布している傾向がある。老人ホーム等の福祉施設も市内各所に多く存在している。また保育所入所待機児童数は 2010 年調べで 0 人となっている。

現在、中心市街地の真鍋地区にある土浦協同病院が施設の老朽化のためにおおつ野地区に移転することが決まっている。しかし移転後も現在地に診療機能を残し、外来や夜間救急医療を担うことになっているため、老朽化の問題は依然として残る。また病院移転によって中心市街地での駐車場不足の問題は緩和されることが予測されるが、おおつ野地区は中心市街地から離れた場所にあるうえ、鉄道駅からも遠く、交通手段は限られている。病院の利用が多い高齢者でも容易にアクセスできるような交通計画を立てることが、今後の課題である。

2-8 教育

土浦市は筑波研究学園都市に隣接している。また市内には多くの高校が立地しており、県内でも水戸市について第 2 位の高校生数を誇っている。特徴として市外からの学生も多く土浦市の高校に通っている。筑波大学と地元の高校とが連携した地域活性化シンポジウムの開催をした経験があるなど、教育に対して積極的な取り組みもおこなっている。

3 マスタープランの構想

3-1 将来の人口フレーム

平成 25 年 9 月時点で土浦市の人口は約 14.3 万人であるが、図 2.1 の示すとおり土浦市の人口はコーホート分析によると 2035 年には 12.2 万人にまで減少することが見込まれる。一方でこのマスタープランの計画での市の魅力向上や子育てエリアでの政策により人口の社会増・自然増が見込まれるため、人口の減少幅が小さくなることを予測し、2040 年目標人口を 13 万人とする。

3-2 土浦市の将来像

市民が土浦のまちを知り、好きになった上で、周囲にその良さを伝えたい、まちを造ることで土浦に住み続けたい、関わりを持ち続けたいと考えられるような土浦市とする。

3-3 コンセプト

土浦市の現状をふまえ、また上記の将来像を設定したうえで、それらを実現してゆくためのコンセプトを「**Tsuchitter** ~つちうらを フォロってファボって リツイート~」とする。このコンセプトは **twitter**(**Twitter** 社から提供されている **web** サービス。140 文字以内の短文ブログをネット上に投稿できる)の仕組みに着想を得たものである。**Twitter** では、フォロー (=友達になってつながる)、ファボ (=お気に入りに登録する)、リツイート (=まわりの人に情報を広める) などの用語が使われる。私たちはこの **Twitter** の 3 つの概念を参考に、コンセプトを設定し、土浦の将来に向けたまちづくりの提案を行う。この提案において **Twitter** の 3 つの用語を以下のようにおきかえて定義した。

- ・フォロー：土浦のまちを知る
- ・ファボ：土浦のまちを好きになる
- ・リツイート：土浦のまちの良さをまわりに伝える

以上の3要素が図3-1の示すように循環して繋がる体系となるマスタープランを目指す。



図 3.1 : コンセプト概念図

4 重点整備計画

住み続けたいと思えるつちうらの実現のために、教育・観光・子育て・にぎわい・広報をキーワードに5つの重点整備計画を示す。

4-1 教育 ～愛つちうら育育計画～

4-1-1 現状

平成23年度土浦市民満足度調査より土浦への愛着心の項目において若い世代ほど低い値を示している。同様に広報つちうらの購読率も図4.1が示すとおり若い世代ほど低い値を示している。土浦は東京へのアクセスが良く、地元における若者の活動が少ないことが考えられる。若い世代に土浦の自然や文化、産業などの土浦が持つ資源についてもっと知ってもらうことが必要である。

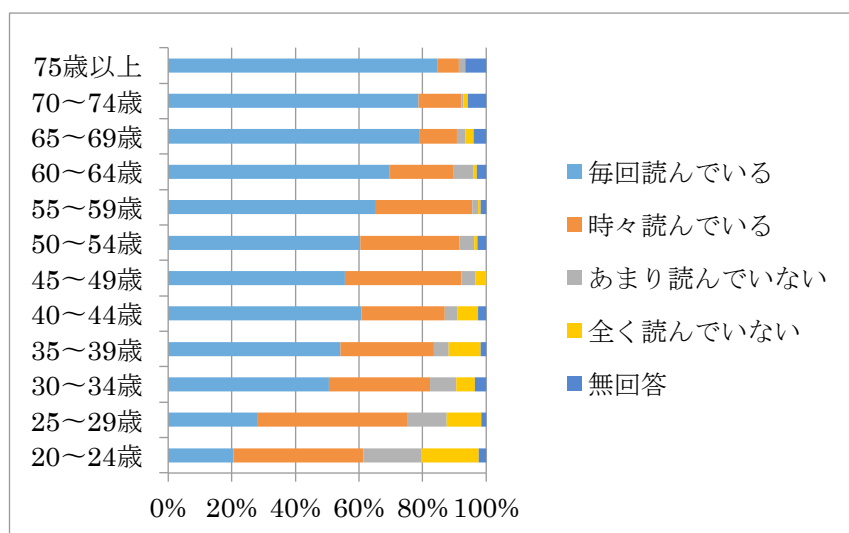


図 4.1 : 広報つちうら購読率

4-1-2 提案

若い世代に教育を通して土浦のことをもっと知ってもらう場を増やす。土浦の自然や文化について学ぶことで土浦の魅力に気づいてもらい土浦への関心を高めることを目的とする。更に、学習内容を市内外に発信して取り組みを広める。計画実施にあたり土浦市内の学校に規範となるシラバスを提示し、それに準じた教育プログラムを組んでもらう。

具体的には、小学校では体験型学習、中学校では発信型学習、高校では提案型学習を行い、成長とともに高いレベルの学習プログラムに取り組む。体験型学習では、土浦まち歩き探検やレンコン収穫体験などを行い土浦のまちを体で学ぶ。発信型学習では、学級新聞を作成し広報つちうらの特集ページとして提供したり、あるいは編集に携わったりさせる。広報つちうらに関与させることで若者の購読率のアップにもつながる。高校生には、大学生にサポートをしてもらいながら自ら問題発見をし、それに対する提案を行わせる。高校生のうちにまちづくり提案のノウハウを学ぶことができる。

また、小・中学校の最高学年では下級生をサポートしてもらおう。これにより下級生は学習の質や効率の向上につながり、上級生は下級生への指導を経験でき、多面的な教育が可能となる。これらの体系を示したものが表 4.1 である。また小学生・中高生におけるフォロー・ファボ・リツイートの段階を示したものが図 4.2 である。

表 4.1：教育プログラムの体系

小学1～5年生	体験型学習
小学6年生	下級生サポート
中学1～2年生	発信型学習
中学3年生	下級生サポート
高校生	提案型学習



図 4.2：教育プログラム概要イメージ

4-2 観光 ～ちゃりんこつちうら！～

4-2-1 現状

土浦市北西部に位置する新治地区は田園と果樹園の多く立地する農業の盛んな地域である。一方後継者不足が叫ばれ、農業従事者数は2000年からの5年間で1,901人から18.5%の減少を見せている。そのため耕作放棄地の拡大も問題となっている。自然面では水郷筑波国定公園に指定される筑波山麓と桜川を有し、大規模自転車道であるりんりんロードと霞ヶ浦自転車道、朝日峠のスカイスポーツなどにその空間は活用されている。また図4.3に示す通り2016年までに茨城県は霞ヶ浦を一周する自転車道を整備しりんりんロードと一体となった「水郷筑波サイクリングコース」を計画しており、土浦市は将来的に自転車政策の要衝となる。



図 4.3：水郷筑波サイクリングコース完成予想地図

4-2-2 提案

新治と霞ヶ浦を自然エリアに指定し自然レクリエーションと農業振興の場として位置づける。

提案1：自転車政策「ちゃりんこ つちうら！」

第一に市周辺の自転車環境整備について目を向ける。りんりんロードと霞ヶ浦自転車道との接続道を整備するほか、土浦駅前の新図書館付近(後述)にサイクルステーションを設置する。これは現在モール505に設置されている「まちなか交流ステーションほっと one」の提供するコインロッカー、トイレ、空気入れ、レンタサイクル等を拡充し、スポーツバイクやサイクリングウェアのレンタル、シャワーや駐輪場の整備等を行うことで自転車利用者の利便向上と利用者増を狙う。これらは東京都の皇居周辺に位置する民間のランステーションをモデルとし、運営は現在の「ほっと one」と同様に土浦商工会議所に委託する。

第二に、新治地区を縦断する「新治小町ポタリングコース」を選定する。ポタリングとは自転車による散歩のことである。小町の里周辺の文化資源と自然資源を融合させ、人々に自転車で走ってもらうことで従来は気づかなかった新しい魅力を発掘し、好きになってもらい、かつ新治の魅力を広めてゆくことを目指す。ルートは既存道の歩道設置区間や交通量の少ない農道に設定し事故や渋滞を回避する。りんりんロード旧常陸藤沢駅を起点とし、JA さんふれ新治・温泉のある総合福祉センター等を経て、小町の館を基幹とした小町の里周辺文化エリアを回る。これを示したものが図 4.4 である。将来的には新治にとどまらず市内各所にポタリングコースを設定し土浦の資源を活かしたキャラクターを持たせるほか、他市町村とも連携し水郷筑波サイクリングコース一帯でもポタリングコースの設定を進め、「自転車王国」として茨城県南地域の魅力アップを狙う。また新たなサイクリングの提案として現在季節限定で運航している土浦-潮来間のフェリーに自転車を載せ霞ヶ浦を遊覧、その後自転車により霞ヶ浦を半周し土浦へ戻るコースを提供することで観光とサイクリングの両者を楽しめるプランも新設する。



図 4.4 : 水郷筑波サイクリングコース完成予想地図

提案 2 : 「ほっともっと・農業体験」

11 月 3 日、小町の里にて開催された稲刈り体験に参加し調査を行った結果、内容は充実し満足のいくものであった一方で参加者同士の交流がほとんど見られないことが分かった。現在の農業体験でも地域特性を活かし、また農業への関心を集めることはできるだろう。私たちはこれに交流というキーワードを取り込むことで更なる魅力向上を目指す。小町の里と周辺農家で農業体験の受入先を設け、ホームステイと日帰りの 2 パターンのコースを開設する。その上で参加者を小グループに分け、農作業だけでなく農作物の調理や食事など共同作業の形をとりながら生活をトータルに体験することで参加者同士の交流を生み、新しい情報交換の場として、またより新鮮な体験として、農業体験だけでない付加価値を付けてゆくことを狙いとする。

4-3 子育て ～常磐線すくすくエリア計画～

4-3-1 現状

常磐線は2015年春に東京駅まで延伸することが決定しており、利便性が高まることから、ベッドタウンとしてより人気のエリアとなることが予想される。そこで、よりベッドタウンとしての魅力を向上させるため、「子育て」をキーワードに2つの提案を行う。

4-3-2 提案

もともと子育て世帯に適したエリアであることから、その強みをさらに伸ばし特色として打ち出すために以下2つの事業を提案する。

提案1：「すくすくサロン@さんばる」の設置

土浦市は「わらべ」と「のぞみ」という2つの子育て支援施設を運営しているが、それらの拠点となる子育て支援施設を常磐線の駅近くの利便性の高いところに設置したいと考えた。そこで、荒川沖駅直結の商業施設でありながら空き店舗スペースが多く閑散とした印象のさんばるに常磐線沿線を「子育て・教育のまち」としてPRする拠点となる子育てサロンをつくることを提案する。2階の空き店舗（195㎡：図4.5）につくり、具体的には以下の2つの施設を設置する。またさんばるの専門店街やメガドンキホーテで子どもやその親をターゲットとしたイベントやキャンペーン、店舗展開を行う。子育て施設の設置と合わせてさんばる全体で子どもとその親をターゲットとしたマーケット戦略を立て、相乗効果を狙う。事業主体は土浦市、運営は子育て支援団体(NPO 法人いろはなど)に委託することを考える。

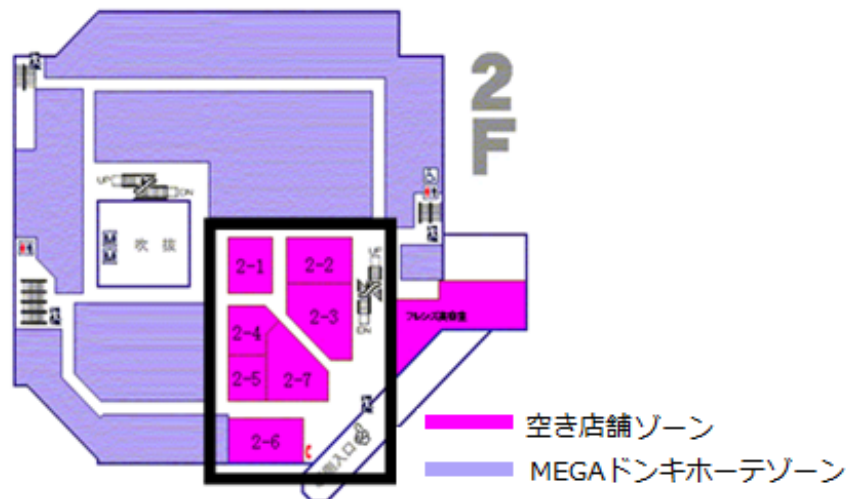


図 4.5：すくすくサロン@さんばる 設置予定図(さんばる 2階空き店舗)

①すくすくコミュニケーションルーム（イメージ：図4.6）

未就学児～小学生とその親、妊婦などを対象とし、簡易なシアターを設ける。対象者は無料で入場でき、子ども向けのビデオや映画を上映したり、マタニティ教室や離乳食教室(どちらも土浦保健センターで行われている)などの教室を開いたりする多目的なスペースとする。未就学児の一時預かりも行う。

②子育てほっとカフェ（イメージ：図4.7）

未就学児とその親、妊婦(カフェは対象者以外も利用可)などを対象とし、親同士の交流を目的としたカフェ。未就学児をすくすくコミュニケーションルームで一時預けている間、ここで親はほっと一息つきながら自由な時間を過ごせるようにする。また、カフェ内部は子育てに関する情報を掲示し、子育て情報拠点としての役割も持つ。未就学児を持つ親と妊婦にのみ飲食の割引がされるようにする。ここでの交流を通じて出産や子育てに関しての情報共有や相談を気軽にできることを目指す。



図 4.6 : すくすくコミュニケーションルーム イメージ図



図 4.7 : 子育てほっとカフェ イメージ図

提案2：放課後子ども教室の設置

放課後こども教室とは、文部科学省が平成19年度より取り組んでいる事業。小学校の余裕教室等を活用して、地域住民の参画を得て、子どもたちとともに学習やスポーツ・文化活動等の取組を支援するというもの。市町村が行う事業に対して、国からの補助金が下りる仕組みとなっている。土浦市でも現在7か所の小学校施設で行われている。

常磐線沿線を子育てエリアとして特色付けるために、この放課後子ども教室を荒川沖エリアと神立エリアの小学校にも設置する。地元住民のボランティアを募り、勉強を始めさまざまなことを子どもたちに教える場、地域住民と交流する場とする。神立に関しては、前述の神立商工振興会との連携も可能と考える。また、土浦市放課後子ども教室推進事業実施要綱に則り、実施日は週2回、実施日の放課後～午後5時までを実施時間とする。なお、事業主体は土浦市、運営は子育て支援団体に委託する。



図 4.8：土浦市内の放課後子ども教室実施校地図

4-4 にぎわい ～土浦まんなか復活大作戦～

4-4-1 現状

「イオンモール土浦」をはじめ、つくば市の「iiias つくば」、阿見町の「阿見アウトレット」など郊外型ショッピングセンターが増加していることによって、土浦市の中心市街地の商業は年々衰退している。中心市街地の商店街では店主の高齢化により、シャッターを閉める店舗や空き店舗が増加し、モール 505 についても空き店舗が増加し魅力的とは言えない状況である。また平成 27 年には市庁舎がウララに移転することが決定しており、中心市街地の大型店舗の一つが失われ、さらに中心市街地の商業の衰退が加速することが考えられる。

4-4-2 提案

中心市街地をまちづくり、観光・イベント情報発信の拠点さらに商業・教育の拠点として再整備し、土浦駅西口の賑わいを創出する。土浦市民 1 人 1 人が「将来の土浦市はこうなってほしい」というまちづくりのヴィジョンを持ち、土浦市民や土浦を想う人全員でまちづくりを進めていくことを目標に掲げる。中心市街地の施設配置などの計画全体図を示したものが図 4.9 である。



図 4.9 : 中心市街地全体計画図

提案 1：まちなか交流ステーションほっと One+（イメージ：図 4.10）

現在モール 505 内にあるまちなか交流ステーションほっと One をペデストリアンデッキに面した市役所玄関口に新たな機能を持たせ開設し「まちなか交流ステーションほっと One+」（約 250 ㎡）とする。運営主体は土浦商工会議所・土浦市・筑波大学とする。また、施設の内容は以下の通りである。

- ・ 観光案内
- ・ ギャラリー（地域模型などを展示、ワークショップ、まちづくりスクールの開催）
- ・ カフェ（委託）
- ・ オフィス（常駐スタッフ用）
- ・ オープンテラス
- ・ ガーデン

用途を限定せずに利用できるギャラリーを設けることで市民の積極的な活動の場として開放する。土浦商工会議所が代表を務める現在のまちなか交流スペースほっと One のスタッフを常駐スタッフとし、土浦市は商工会議所への資金補助を行う。筑波大学は活動内容を 3 つの団体が共同で企画する定期的なワークショップや講師陣に大学教授等を迎えて行うまちづくりスクールを開催に関わる。これらの活動によって積極的に市民がまちづくりについて考える機会を設ける。さらにまちづくりスクールを筑波大学の授業と連携させることで学生が参加し、活発な活動となる事を狙う。

ワークショップの例として駅前ガーデンワークショップを挙げる。これは駅前ガーデンを利用して花やハーブ、フルーツなどを土の入れ替えなどを含めて体験、勉強できるワークショップである。その他には観光の視点からのまちづくりワークショップなどが考えられる。



図 4.10：まちなか交流ステーションほっと One+イメージ

提案2：ながら交流スペースを持つ商業施設の計画

現在、土浦駅西口にある駐車場の敷地に現在計画されている図書館施設の代わりに新たに6階建て（1，2階は駐車場）のながら交流スペースを持つ商業施設を計画する。土浦駅からの動線を確保するためペDESTリアンデッキをこの施設の3階につなぎ、様々な広さのながら交流スペースを各店舗階にランダムに配置する。（イメージ：図4.11）

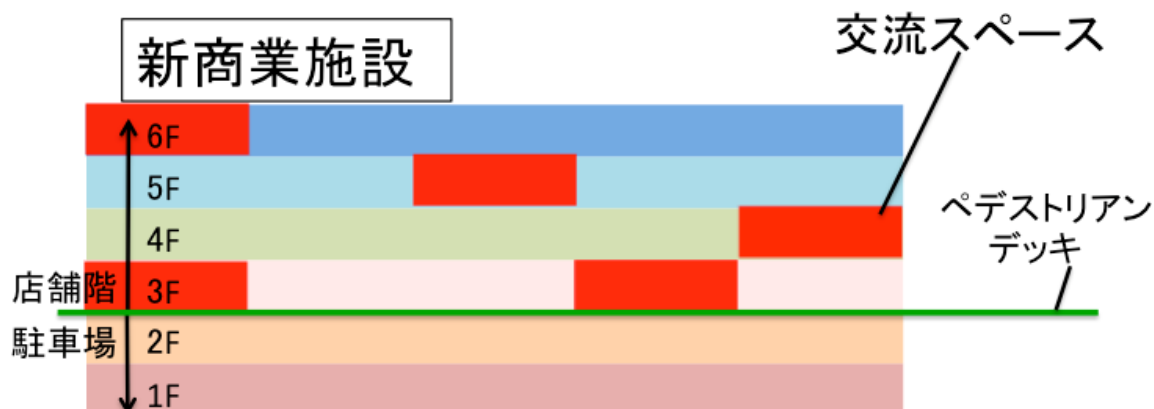


図 4.11：商業施設断面イメージ

なお、「ながら交流スペース」（イメージ：図4.12）は市民のコミュニティ活動・地元アーティストの講演・キッチンスタジオなど様々な目的に活用できるものである。買い物を目的に来た方にはコミュニティ活動を知り、参加するきっかけを創り出す。さらに普段このような商業施設で買い物をしない方が活動を目的に足を運ぶようになり、そこで買い物をするきっかけを創り出すといった相乗効果を狙う。このスペースを施設に入れ込む事で主婦や高齢者など年齢にかかわらず交流する機会を設けることができ、この施設に行けば話し相手がいるという状況をつくりだす。

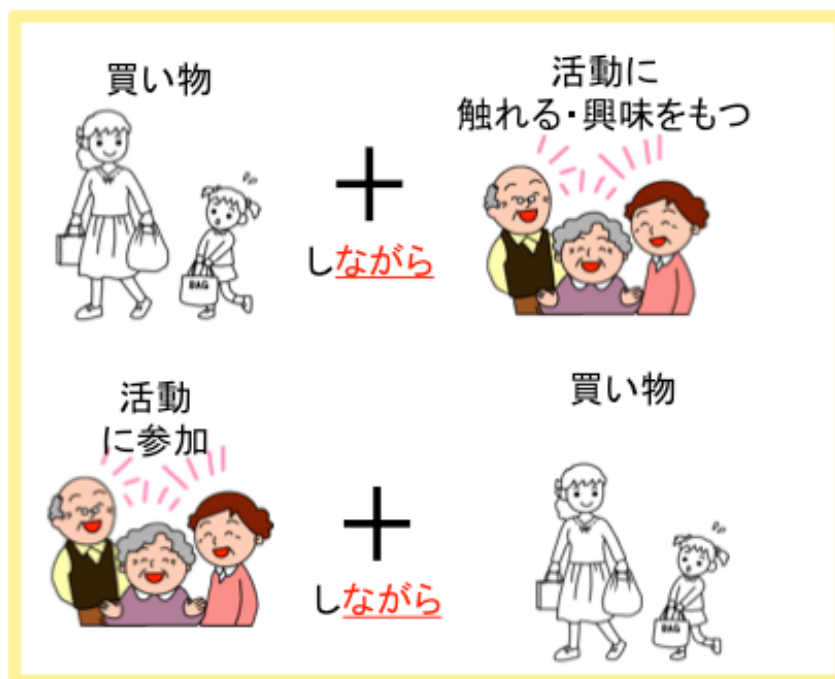


図 4.12：ながら交流イメージ図

提案3：新図書館の計画（イメージ：図4.13）

現在のモール505の敷地は土浦駅から徒歩で約15分と奥まった場所にある。さらに高架によって薄暗い雰囲気となっている。この敷地に一定の利用者が確保できる図書館を高架下のスペースを埋めるように計画する。高架下の空間を埋めることで暗さなどの地域への負の影響を緩和する。この新図書館は実際に計画中の図書館の図書スペース約6000㎡を確保した施設とする。また大きな吹き抜けを持たせた2階建ての施設とし、高校生などが利用できる勉強スペース、予約制で利用できる会議スペースなどを確保する。

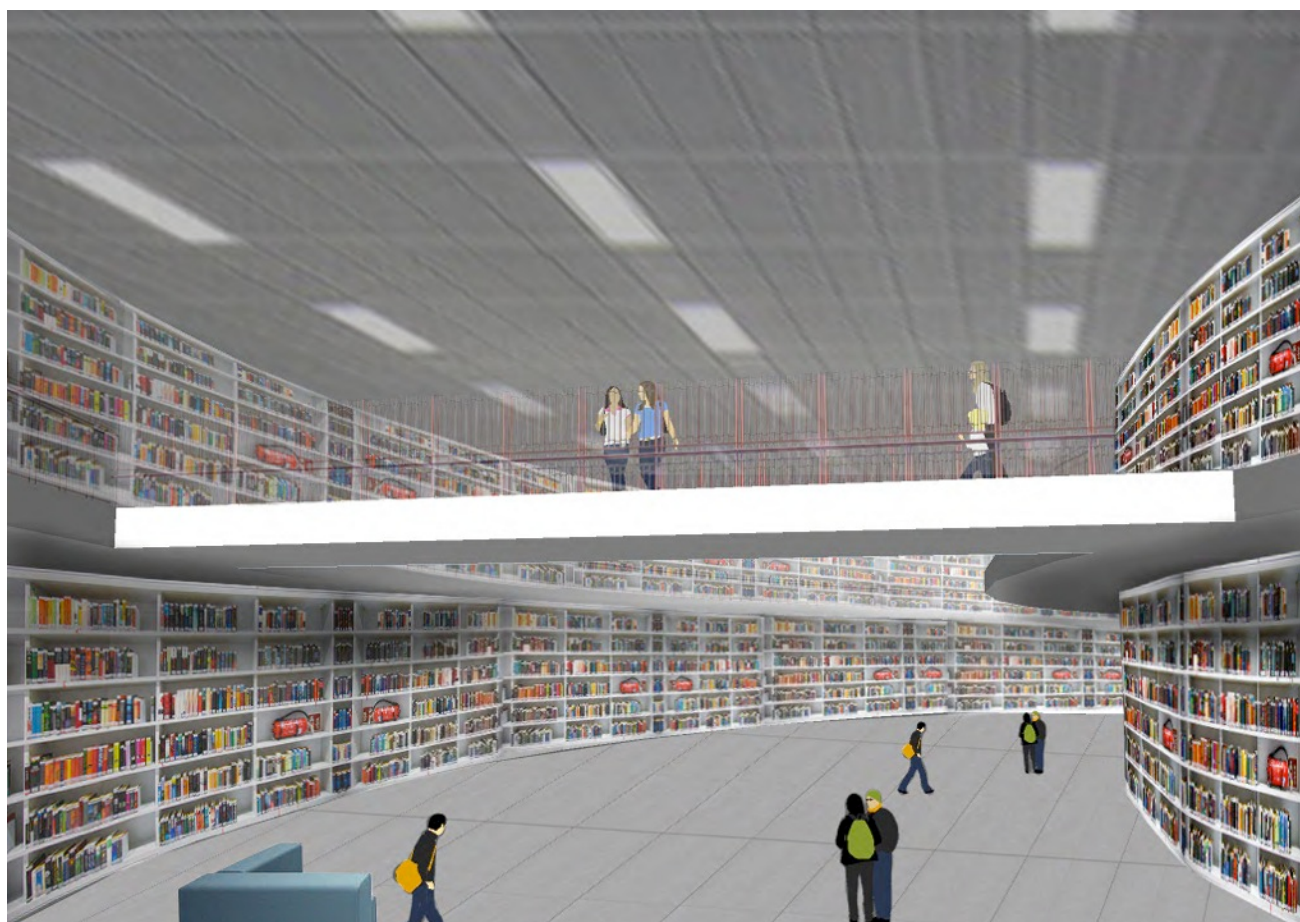


図 4.13：新図書館内イメージ図

提案4：公園の計画（イメージ：図4.14）

土浦駅西口にはオープンスペースが少なく、都市の構造として、また災害時の対応を考えると改善すべき点として挙げられる。そこで現在モール505の東側にある駐車場にオープンスペースとして公園を計画する。緊急災害時に対応できるように図4.15に示すような、かまどベンチ・ベンチトイレ(災害時にかまど・トイレになるベンチ)などを設ける。また公園にはカフェや小規模なショップを展開し地域住民の交流を生む空間とする。さらに、現在まちなか交流ステーションが担うサイクルステーションを独立させて配置。更衣室・シャワールームなど設備を充実させて展開する。



図 4.14 : 公園イメージ

通常時



かまど使用時



図 4.15 : かまどベンチ

4-5 広報 ～ビビッと魅力発信！～

4-5-1 現状

現在、市は情報発信に広報誌、ホームページ、Twitterなどの手段を使っている。その利用者について、若年層においてはTwitterの普及率が比較的高いが、高齢になるに従いインターネットを介した情報取得には抵抗を感じるようになると一般に考えられている。また平成23年土浦市満足度調査によると広報つちうらの購読率は75歳以上で84.9%を誇るのに対し、20-24歳では20.5%と非常に低い現状が分かる。また市の広報についての設問への回答に関し「現状満足」に次いで「PR不足」が挙げられるなど市民に問題意識があることがわかる。

4-5-2 提案

現在ある広報ツールをさらに活かし、市内外の人々に土浦市の魅力を伝える。

提案1：広報つちうらの活用

3-1-2で述べた愛つちうら育育計画での発信型学習で学級新聞を作成し広報つちうらの特集ページとして提供したり、あるいは編集に携わせたりする。これにより、若者の広報つちうらの購読率アップと内容の充実によるより良い広報誌を目指す。

提案2：Twitterの活用

現在土浦市には公式アカウントが存在する。私たちはTwitterの情報の相互性に注目し、以下の2つを提案する。

2-1.市民と行政の意見のやりとりの場に

現在の市公式アカウントは土浦市の情報を機械的かつ一方的に提供するものである。このアカウントに人格(キャラクター)を持たせることで親近感を抱かせる。また、Twitterのリプライ(コメント送信機能)を用いて生活情報やイベント、簡単な市政への質問などに解答するものとし、市民と行政が意見をやりとりできる場とする。

2-2.土浦の魅力を伝える場に

Twitter上で募集した土浦の写真や土浦写真コンテストの応募作品などを1日数枚ずつ市の公式アカウントで公開する。土浦市の魅力アピールになるだけでなく、写真を提供することで市民が情報発信者となり、市民目線での魅力発掘ができる。

5 その他の計画

5-1 チャレンジエリア計画

5-1-1 現状

神立地区は工業団地が立ち並ぶ工業の街であり、神立駅周辺の土地区画整理が決まっている。また神立駅周辺の商店街や企業 107 社が神立商工振興会に所属しており、3 年前に振興会の役員若返り「神立から！元気発信!!」をスローガンに神立地域のハザードマップであり商店やまちを紹介する「神立手帖」を作ったり、ドリンクラリーなどの独自のイベントを開催したりするなど工夫を凝らしている。

しかし神立駅前に活気があるとは言い難く、土地区画整理により現在神立駅周辺にある商店の多くが閉店または移転してしまう状況である。

5-1-2 提案

神立商工振興会の方々は独自のイベントを開催したり神立手帖を発行したりとやる気に満ち溢れているので、その強みをさらに伸ばし特色として打ち出したい。そこで、以下の 3 つを新神立駅前広場に提案する。

提案 1：神立マップの設置（図 4.9）

神立商工振興会が発行した神立手帖に神立とその周辺の店が記してある神立マップが載っている。それを大きなパネル状にして駅前広場に設置することで、初めて神立を訪れた人でも神立にどのような店があるかが分かり、駅周辺の店の集客拡大を目指す。



図 5.1：駅前神立マップ看板完成予想図

提案2：イベント開催

神立商工振興会は神立フェスティバルやドリンクラリーなど、さまざまな独自のイベントを行っている。2013年11月24日の神立フェスティバルは神立第3児童公園にて行われたが、神立地域外の人にはあまり馴染みがなく、少し立ち寄るといことがし難い。

そこで駅前広場でイベントを開催することで、神立に初めて訪れる人もイベントを楽しむことができ、駅前が活気づくことを目標とする。また、その際に神立手帖やクーポンを配ることでイベント後も神立に立ち寄ろうと思える場所にするを目指す。

提案3：チャレンジショップの設置

駅前広場にチャレンジショップを3区画設置し、互いに競わせ、売上げが良いほど長期間継続して店舗を出せるという決まりとする。チャレンジショップは資金面で土浦市の援助を受け、神立商工振興会が経営に関するアドバイスを行う。これによって、地域の温かさを残しつつチャレンジできる場とする。

そもそもチャレンジショップとは商店街の空き店舗対策に行われているものであり、期間を決めて安い料金を店舗を貸し、店を運営させるものである。借りる側のメリットとしては、低い費用で自分の店が持てること、経営のノウハウを学べること、経験が詰めること、出店者同士で情報交換などの交流ができることなどが挙げられる。また、貸す側のメリットとしては空き店舗のままにしているよりも活気が生まれること、人々のニーズにあった店を出すことができることなどが挙げられる。

5-2 医療エリア計画

5-2-1 現状

おおつ野地区は職住近接都市を目指し計画された。しかし土浦協同病院移転を含めた数区画以外の区画への工場誘致は難航しており、構想の実現はできていない。

5-2-2 提案

提案1：医住近接

私たちは職住近接から医住近接のまちへ構想をシフトすることを提案する。おおつ野が医療福祉の充実していることはもちろん、医療研究・教育でも先進的なまちとする。

図4.10のように土浦協同病院附属看護専門学校を協同病院に隣接した地区に移転し、更にその周りにアニマルセラピー施設、リハビリセンター、新薬開発や福祉ロボット研究所などを誘致することを提案する。これにより医療教育の環境の向上とともに医療サービスの充実を図る。おおつ野地区のすぐ南にある上大津東小学校でアニマルセラピーに活かせる学校飼育が比較的簡単な熱帯魚や金魚の飼育を行ってもらい、施設への譲渡や施設訪問を行いセラピーとして活用する。また、福祉ロボット研究所では筑波大学の技術やノウハウを提供してもらいつくば市とのつながりも持たせる。医療従事者と利用者だけでなく、学校や保護者にも医療を通したつながりを持たせる。おおつ野地区全体が医療への関心が高く知識も多いエリアとなることを目指す。



図 5.2 : 医住近接計画完成予想図

提案 2：医療交流サロン

病院内に医療交流サロンを併設する。ここでは新人医師や専門学校の学生が実習を兼ねた公開講座を一般に向けて行う。医療サービスを提供する側だけでなく、受ける側にも医療について学んでもらう場とする。また、情報共有と憩いの空間の機能も持たせる。講座を聴きに来た人、病院利用者・関係者など誰もがくつろいで会話を楽しんだりできる空間とし、病院利用者や市民は気軽に意見や要望を医療従事者に伝えることができる。また、協同病院周辺の医療系の施設の情報の掲示も行う。

6 まとめ

本マスタープランで述べたそれぞれの構想をまとめると図 6-1 のようになる。政策により図 3.1 に示したようにフォロー・ファボ・リツイートが循環する政策の流れを実現することにより、住み続けたいとなるつちうらを実現させ、人口の減少幅を小さくするとともに、住民や外部からの来訪者の便益を高めることが出来るであろう。未来の土浦をつくる担い手はいまの私たちひとりひとりである。



図 6.1 : 土浦市地域別構想

7 謝辞

今回の都市計画マスタープラン実習において、多くの方に多大なるご協力をいただいた。

——ヒアリング調査にご協力いただいた方々——

神立商工振興会 会長 君山毅様

神立商工振興会 元会長 今井章治様

——ご講義・見学にご協力いただいた方々——

土浦市都市計画課のみなさま

牛久市都市計画課のみなさま

当実習 1 班担当 TA の岩片麻実さんには的確な指導、助言を賜りました。また先生方や TA の方々におかれましても中間・最終発表において私たちの発表に対し多くの質問やコメントをしていただきました。技官の皆様にも印刷関係をはじめ様々なことに丁寧にご対応頂きました。多くの方々のご支援とご協力があったからこそ私たちは最終発表までたどり着けたのだと班員一同かみしめております。御世話になった皆様に心から感謝とお礼の気持ちを申し上げたく、謝辞に代えさせていただきます。

都市計画マスタープラン実習 1 班 一同

8 参考文献

- [1]土浦市耕作放棄地対策協議会. “土浦市耕作放棄地解消計画”
http://www.city.tsuchiura.lg.jp/cms/data/doc/1269591701_doc_27.pdf.
- [2]Cyclist_sunspo. “2016 年度日本一のサイクリングロード整備へ:茨城.”
<http://cyclist.sanspo.com/79576>. 2013/06/27.
- [3]国土地理院. “2.5 万分の 1 地形図” (筑波,上郷,常陸藤沢,土浦,常陸高浜).
- [4]土浦市.”土浦駅前北地区第一種市街地再開発事業基本設計概要”.
http://www.city.tsuchiura.lg.jp/cms/data/doc/1219363509_doc_37.pdf.
- [5]土浦協同病院. “新病院について”.
<http://www.tkgh.jp/website/introduction/04sinbyouin/01.html>.
- [6]土浦協同病院附属看護専門学校. “公式ホームページ”.
<http://www.tkkangaku.net/>.
- [7]NPO 法人いろは. “公式ホームページ”.
<http://d.hatena.ne.jp/iroha8258168/>.
- [8]神立手帖. “神立手帖ウェブ版”. <http://kandatsu.org/post/1246>.
- [9]さんぱる. “フロアガイド”.
<http://www.ibarakiken.or.jp/scsunpal/guide/2f.html>.
- [10]土浦市. “統計つちうら”
<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/page/dir001548.html>.
- [11]土浦市. “平成 23 年度土浦市民満足度調査報告書”. 2012/01.
https://www.city.tsuchiura.lg.jp/data/doc/1352963378_doc_3.pdf.
- [12](社)土浦市観光協会. “第 8 回土浦の写真コンテスト”. 2013/07.
<http://www.infonavi.co.jp/~kanko/cgi/news/data/doc/1372924233.pdf>.
- [13]総務省. “わがまち CM コンテスト 2013”. 2013/06/18.
http://www.soumu.go.jp/soutsu/kanto/01sotsu03_01000287.html.

[1],[2],[4]-[13]:2014 年 1 月 24 日最終アクセス

9 資料

9-1 ヒアリング調査概要

表 9.1：ヒアリング調査概要

	日時	場所	対象	内容
1	11/3	小町の里	主婦	土浦は福祉が充実しているが公共交通機関が少ない
2	11/3	小町の里	体験に来ていた女性	ホームページを見て稲刈り体験を知り、友人を誘い参加
3	11/3	小町の里	稲刈りのボランティア	退職して暇なのでボランティアに応募。稲刈りは素人。
4	11/15	小町の館	蕎麦屋店員	直売所の果物などを目当てに来る人や老人ホームの遠足に利用されることも
5	11/15	小町の館	レジ打ち男性	霞ヶ浦を誇りに思っている。中心市街地のシャッター街が寂しい。
6	11/15	さん・あびお	客の男性	さん・あびおには暇なとき来る。バスはありがたいが車を運転できるから使わない。
7	11/28	神立駅	バス利用者	神立の商店が頑張っているのは知っているが、買い物に利用することはあまりない。
8	11/28	神立駅	駐輪場の受付	工場による汚染などが少し気になる。霞ヶ浦の PR がうまくできていない。
9	11/28	神立	神立商工振興会元会長	土地区画整理事業終了後に振興会として何かするつもりはないが、まちづくりには貢献していきたい。
10	1/20	神立	神立商工振興会現会長	神立を盛り上げるためには人や行政に頼るのではなく、自分たちで努力しなければならない。

9-2 企画書

9-2-1 愛つちうら育育計画

企画書

土浦市マスタープラン策定実習資料

提案者 (所属) MP 実習 1 班 / (氏名) 井下純貴

プロジェクト名称	愛つちうら育育プロジェクト(重点整備計画)
現状(問題点,背景)	平成 23 年度土浦市民満足度調査より土浦への愛着心の項目において若い世代ほど低い値を示している。同様に広報つちうらの購読率も若い世代ほど低い値を示してる。土浦は東京へのアクセスが良く、地元における若者の活動が少ないことが考えられる。若い世代に土浦の自然や文化、産業などの土浦が持つ資源についてもっと知ってもらう必要がある。
目的・趣旨	若い世代に教育を通して土浦のことをもっと知ってもらう場を増やす。土浦の自然や文化について学ぶことで土浦の魅力に気づいてもらい土浦への関心を高めることを目的とする。更に、学習内容を市内外に発信して取り組みを広める。
内容	土浦市内の学校に規範となるシラバスを提示し、それに準じた教育プログラムを組んでもらう。神立商工振興会が積極的に職場体験の取り組みを行っており、その取り組みを活かし社会科見学を行う。また、広報つちうらを使った学習を取り入れることで若い世代にも広報つちうらに親しみを持ってもらう。 ※詳細はシラバス参照
将来目標	将来的に本計画を受けた子どもたちが成人後も土浦に住み続けることで、土浦を若い世代を含めた全ての世代の住民から愛される場所にする。
期間	平成 26 年度～ いくつかモデル校を選定し試験導入 平成 27 年度～ 導入校を増加させて本格実施
場所	土浦市
対象者	小中学校・高校の生徒、市民
運営主体	各学校
運営方法	土浦市教育委員会が提示した指導案に基づき各学校が裁量的に判断を行う。
イニシャルコスト	教材準備費用
資金源	市税
ランニングコスト	各学校の実施費用
資金源	市税
今後の課題	体験学習を行える施設や広報つちうら、あるいは周辺大学との継続的な協力を得る必要がある。

土浦市教育プログラム シラバス

プロジェクト名称	愛つちうら育育プロジェクト		
到達目標	教育プログラムに地域に密着した学習を取り込むことで子どもたちに土浦のまちのことを考えさせて好きになってもらう。 発信・提案型の学習を通し、生徒だけでなく土浦市民全体に取り組みを知ってもらう。 各学校に以下の指導内容に準じた教育プログラムを導入し生徒を指導してもらう。		
指導概要	小学校では体験型学習を行い土浦のまちを体で学んでもらう。 中学校では発信型学習を行い市民全体に取り組みを知ってもらう。 高校では提案型学習を行い土浦市の問題発見から提案を行いまちづくりのノウハウを学んでもらう。 また、上級生に下級生をサポートする機会を設けることで多面的かつ理解が深くなる学習とする。		
プログラム例	小学校 1年生 まち歩き探検隊 2年生 レンコン収穫体験 3年生 そば打ち体験 4年生 農業体験 5年生 社会科見学 6年生 下級生サポート 中学校 1年生 広報つちうら編集 2年生 地域の人にインタビュー＆報告会 3年生 土浦市PRホームページ作成 高校 1年生 土浦まちづくり提案 2年生 (大学生や専門家の協力を仰ぎシンポジウムを開催) 3年生	学習・体験 体験型学習 発信型学習 提案型学習	

9-2-2 観光

企画書

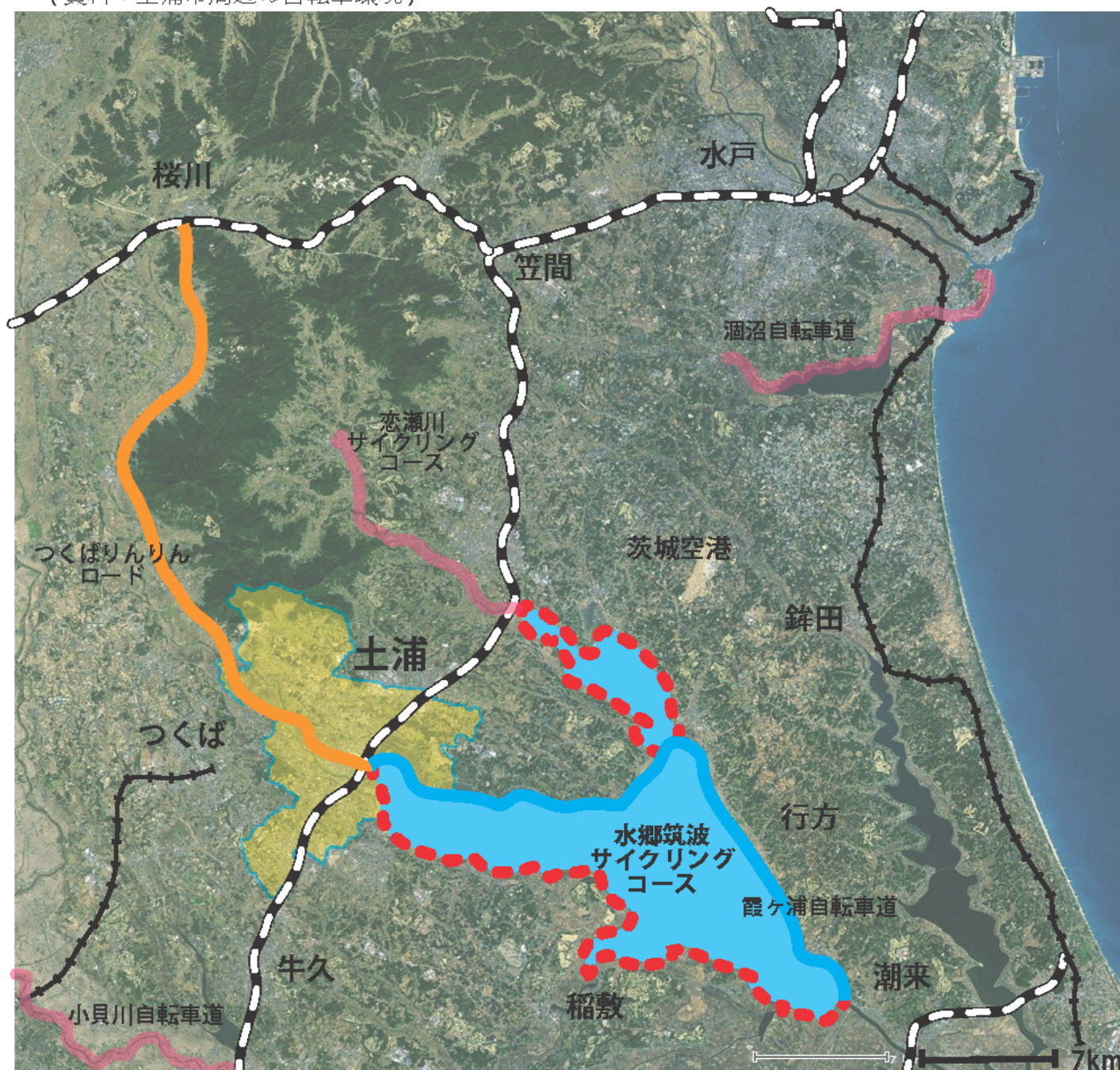
土浦市マスタープラン策定実習資料

提案者 (所属) MP 実習 1 班 / (氏名) 山根優生

プロジェクト名称	ちゃりんこつちうら(重点整備計画)
現状(問題点,背景)	土浦市はりんりんロードと霞ヶ浦自転車道という2路線の自転車道を有し、スーパーフラットの走りやすい地域として有名である。また県が計画する水郷筑波サイクリングコース(霞ヶ浦一周自転車専用道整備とりんりんロードとの一体的な整備)においても自転車道どうしの接続、沿線における数少ない市街地、常磐線との接続等という意味において要衝となることは確実である。一方で現状では自転車道どうしの接続の悪さや「素通り地点」となる可能性など問題も持ち合わせている。 現状における市内の自転車政策については自転車道整備やモール 505 にて商工会が開設した店舗である「まちなかほっと One」が提供するレンタサイクルやロッカー、市の刊行する自転車道パンフレットなどが挙げられるが、これらを土台にしより拡充させてゆく。
目的・趣旨	自転車の利用を通じて市内外の多くの人々に土浦市のもつ良さを知ってもらうとともに、その魅力について利用者に好きになってもらうことを狙いとする。副次的なものとしては非自動車交通による CO2 削減や健康増進効果も期待される。なお、政策を進めてゆく中で交通の安全性も確保しながらより一層の自転車活用を推進するものとする。 また、これら自転車道の整備は首都圏のみならずその規模と質から日本中からサイクリング愛好家を集められる可能性を有している。2020 年にオリンピックを控えた日本において大規模かつ本格的にサイクリングに取り組むことのできる環境として観光の役割を担うことができることが予想される。
内容	以下の3項目を政策の柱として掲げる。 ○水郷筑波サイクリングコースとの連携 サイクリングコースの枠組みの中で周辺市町村との連携を図る。自転車道を案内するために全市町村で統一の形式による看板を設置。またボタリングコース(後述)を霞ヶ浦周辺の随所に設け、「大規模自転車道とボタリングコース」の枠組みを霞ヶ浦周辺の全域にひろく整備してゆくものとする。 観光の面では、現在土浦港から潮来に向けて就航しているフェリーに自転車を搭乗させることで同区間の霞ヶ浦遊覧と潮来から土浦までの霞ヶ浦半周のサイクリングを行うプランを設定。霞ヶ浦におけるサイクリングをより手軽にする機会を提供するとともにスポーツと観光を一体的に提供できるようにする。 ○ボタリングコースの整備 新治地区には小野小町伝承が存在し、小町の墓などの史跡や小町の館など公的施設、筑波山南麓と農村との風光明媚な風景などの観光資源が豊富である。またりんりんロードからのアクセスも良い。よってりんりんロード旧藤沢駅を起点とするボタリング(自転車による散歩)コースを策定することで自転車を使ったこれらの資源をめぐる歴史と自然を全身によって体験する「走る」以外の自転車の楽しみ方を提示するとともに地域の魅力発信を図る。この新治をモデル地区として随時市内他地域へも整備を拡大してゆくこととする。また前述のとおり他市町村においてもボタリングコースの設定を依頼する。

将来目標	○サイクルステーションの整備 現状ではモール 505 において商工会が「まちなかほっと One」という店舗を開設し、観光情報の提供や空気入れ・ロッカーの提供などを行っている。この取り組みを下地とし自転車利用者のためのサイクルステーション(ロッカールーム、シャワー、レンタサイクル、レンタルウェア、駐輪場などを完備したサイクリングの拠点)へと発展させてゆくことで利便度向上と利用者増を図る。 ○霞ヶ浦満喫ルートの提供 現在ラクスマリーナにより季節限定ではあるが土浦から潮来に向けたフェリーが就航している。このフェリーの往路(土浦-潮来間)は自転車をフェリーに寄せ霞ヶ浦を遊覧、のち潮来から霞ヶ浦自転車道を利用してサイクリングを楽しむというルートを設定し、霞ヶ浦をまんべんなく楽しむことのできるコースを設定する。
	日本一気持ちよく走ることのできる自転車道環境の整備と、自転車道を通じた地域の魅力発信を行うことを通して、土浦やその周辺における観光の促進と、土浦ブランドの確立を図る。
期間	各種整備 平成 26 年～平成 28 年 サイクルステーション開設 平成 30 年～(土浦駅西口再開発完了時点)
場所	新治地区(ポタリング)、土浦駅西口地区(サイクルステーション)、水郷筑波自転車道全域
対象者	市周辺住民、観光客(サイクリング愛好家など)
運営主体	土浦市 + 茨城県(水郷筑波サイクリングコースとの連携)
運営方法	土浦市による整備を行う。その際、茨城県や他市町村との連携も図る。またサイクルステーションにおいては皇居ランステーション(皇居周辺において皇居ランナーを総合的にサポートする民間施設)をモデルとし、民間の事業者を募る。
イニシャルコスト	看板設置費、コース選定経費/サイクルステーション設置費用
資金源	市予算/民間負担(一部を市が助成)
ランニングコスト	サイクルステーション運営費
資金源	市予算よりテナント料分の補助
今後の課題	新治小町の里以外へのポタリングコース策定の展開。新治をモデル地区とし、随時市内他地区へも展開させてゆく。 概念図参照

(資料：土浦市周辺の自転車環境)



茨城県南は傾斜の少ない地域としてサイクリング愛好家に愛用されている。同時に首都圏から60km圏内であり常磐線によってアクセスが容易である点もこの地域の利点である。こうした背景から土浦市にもつくばりんりんロードと霞ヶ浦自転車道の2路線が整備されている。また、茨城県はこれら2路線の他に霞ヶ浦を一周する自転車道を整備し、平成28年までに「水郷筑波サイクリングコース」とすることを計画している。この地図の示す通り、土浦市は3自転車道の結節点かつ常磐線との接続点となる。こうしたことから今後土浦市において自転車に関する政策は観光・健康・自然などの面で非常に重要となることが予想される。

この自転車道に接続したポタリングコースを設定することにより自転車道周辺以外の地域以外へも政策の波及効果を見込むことが出来る。こうした取り組みを土浦市以外の市町村とも連携し、案内板やポタリングコースの整備を霞ヶ浦周辺の一帯で行ってゆく。

- 凡例 -
- 水郷筑波サイクリングコース（仮称）
- - 霞ヶ浦自転車道
 - - つくばりんりんロード
 - - 整備予定の自転車道
 - - その他既存自転車道
 - - ポタリングコース（イメージ）

(資料：新治地区における自転車を用いた観光奨励)



土浦にいはいり小町の里 ポタリングコース

□構成資源

- ・小町の館
- ・朝日峠展望公園
- ・小野越峠ハイキングコース
- ・小町の腰掛石
- ・小町茶屋
- ・小野小町の墓
- ・向上庵
- ・清滝寺
- ・東城寺
- ・日枝神社
- ・沢辺橋
- ・金嶽神社
- ・甲山城跡
- ・総合福祉センター(温泉)
- ・JAさんふれ新治
- ・筑波鉄道旧常陸藤沢駅

凡例 -

- 小町の里ポタリングコース
- つくばりんりんロード
- 周辺の見所ポイント

ポタリングとは「自転車による散歩」の意。サイクリングが走ることを目的としているのに対し、ポタリングは自転車により周辺の散策を楽しむことを主眼においている。大規模自転車道の整備のみではともすれば通過点としかならない地域にも光を当て、観光資源を活用するためにこうしたポタリングのためのコースを大規模自転車道周辺にいくつか設定することは非常に効果的である。

上の地図は土浦市新治周辺を示したものである。この地域は水郷筑波国定公園を構成する筑波山南麓に位置し、豊富な自然遺産を有するとともに、平安六歌仙のひとり、絶世の美女とうたわれた小野小町に関する伝承の広がる文化的地域でもある。これらの観光資源を自転車利用者に広く周知し、安全に楽しんでもらうためのポタリングコースを図のように設定する。

また、このコースをモデルとし、市内他地域にもコース設定を展開してゆくとともに、他市町村と連携して霞ヶ浦周辺一帯にポタリングコースの設定を進めてゆくこととする。

企画書

土浦市マスタープラン策定実習資料

提案者 (所属) MP 実習 1 班 / (氏名) 山根優生

プロジェクト名称	ほっともっと農業体験
現状(問題点,背景)	農業生産の多い土浦の中でも農業の盛んな地域の一つが新治地区であり、桜川周辺の平坦な土地には水田が、筑波山南麓には果樹園が、と種類も規模も地域有数である。一方で農業の担い手の高齢化や跡継ぎ不足などにより耕作放棄地の増加などの問題も顕在化している。 また、現在小町の里などで農業体験が催されているが、これらは「農業の体験」に主眼が置かれ参加者同士の交流は生まれていない。
目的・趣旨	普段農業に縁のない市内外の住民へと農業に関する体験の場を提供することで、食について深める食育効果を狙うとともに市内の農業の現状への関心をもつきっかけとなることを目指す。 また、つちうらの農業資源の魅力に気づき好きになってもらい、市内外へと土浦ブランドを発信してゆくことで観光資源としても土浦の農業を位置付ける。
内容	新治地区においてホームステイ形式と日帰り形式での農家体験を実施する。従来の、農作業のみを経験して解散するという形式のものを拡充し農作業と交流を共に産み出すものをめざす。 前者は短期間の宿泊を伴いながら農作業や食事づくりなどの農業に関する生活をトータルに体験する内容を設定する。後者は参加者がいくつかのグループに分かれ収穫や手入れなどの農業体験と食事づくりなどの共同作業を行う内容を設定し、日帰り観光客等の参加も促す。 これらの活動を通して、農業について経験を伴う理解を促すとともに、参加者同士・また農家と参加者同士の交流を促進することとする。 またこの取り組みでは農業に関わりのない人々における農業への関心を集めることで農業の新規担い手を育成するスタート地点としての効果も狙う。
将来目標	新治において、農業に食糧生産と観光の役割を担わせることで、農業の振興と土浦ブランドのアピールを図る。
期間	農業体験 平成 26 年～
場所	新治地区(小町の館、周辺農家)
対象者	市内外住民、ポタリング参加者などの観光客
運営主体	土浦市(小町の館)、JA にいはり
運営方法	土浦市の施設である小町の館を拠点とし受け入れや事務を行う。農業の面においては JA とも連携を図る。
イニシャルコスト	とくになし
資金源	
ランニングコスト	事務費・機材費・人件費、受け入れ先農家への経費支給
資金源	事務は市職員で対応。消耗品は参加者負担。
今後の課題	受け入れ先農家の選定、ポタリングコースとの連携模索

9-2-3 子育て

企画書

土浦市マスタープラン策定実習資料

提案者 (所属) MP 実習 1 班 / (氏名) 瀬島由実加

プロジェクト名称	常磐線すくすくエリア計画-子育てサロン@さんぱるの設置(重点整備計画)
現状(問題点,背景)	土浦市内を走る常磐線は、2015 年春に東京駅まで乗り入れることが決定している。これにより、常磐線沿線はよりベッドタウンとしての人気が高まるエリアとなることが予想される。 また、土浦市内は「わらべ」と「のぞみ」という 2 カ所の子育て交流サロンがあるが、いずれも駅からは離れたところにある。 荒川沖駅直結のショッピングセンターである「さんぱる」は、メガドンキホーテを施設内に持ち多くの専門店も入っているものの、空き店舗が目立ち賑わっているとはいいがたい状況である。
目的・趣旨	常磐線沿線をベッドタウンとしてより魅力アップさせるために、「子育て」をキーワードとして特色付けたい。そこで土浦市の子育て支援施設の中核となる施設を荒川沖駅近くにつくり、常磐線沿線エリアを「子育て・教育のまち」として PR する拠点とする。沿線の人口を増加させることを最終目的とする。
内容	内容 1:さんぱるの空き店舗(2 階 計 195 坪)スペースを利用し、子育て世代にターゲットを絞った 2 つの施設を設置する。 ○すくすくコミュニケーションルーム …【対象】未就学児～小学生、親、妊婦 簡易なシアターを設け、対象者は無料で入場でき、子ども向けのビデオや映画を上映したり、マタニティ教室や離乳食教室(どちらも土浦保健センターで行われている)などの教室を開いたりする多目的なスペースとする。 未就学児の一時預かりも行う。 ○子育てほっとカフェ …【対象】未就学児とその親、妊婦(カフェは対象者以外も利用可) 親同士の交流を目的としたカフェ。 未就学児をすくすくコミュニケーションルームで一時預けている間、ここで親はほっと一息ついたりさんぱる内で買い物をする等自由な時間を過ごせるようにする。 また、カフェ内部は子育てに関する情報を掲示し、未就学児を持つ親と妊婦にのみ飲食の割引がされるようにする。 ここでの交流を通じて出産や子育てに関しての情報共有や相談を気軽にできることを目指す。 内容 2:さんぱる内の店で子どもやその親をターゲットとしたイベントやキャンペーン、店舗展開を行う。 →上記の施設の設置と合わせてさんぱる全体で子どもとその親をターゲットとしたマーケット戦略を立て、相乗効果を狙う。
将来目標	常磐線沿線エリアが子育てに適したエリアであることの認知度を高め、人口の増加を目標とする。

期間	平成 26 年 4 月～9 月:プラン詳細検討 10 月～12 月:設営作業 平成 27 年 1 月～3 月:試験的に営業 4 月～ :正式に営業開始
場所	さんぱる 2 階空きスペース(195 坪)
対象者	妊婦、未就学児～中学生、親
運営主体	候補:NPO 法人いろは など
運営方法	設営費、人件費は土浦市が負担する。家賃はさんぱるを運営する荒川沖商業協同組合の負担とする(実質は家賃免除。子育て施設をつくることによってさんぱるの集客が上がるのが予想されるため、荒川沖商業協同組合にも利益がある。よって家賃を免除することを提案する)。その後の運営は NPO 法人や市民団体に委託する。
イニシャルコスト	設営費(家具、備品など)
資金源	市予算
ランニングコスト	家賃・施設維持費・人件費
資金源	家賃は荒川沖商業協同組合が負担、その他は市予算
今後の課題	メガドンキホーテのイメージから、子育て施設をつくるには現在のさんぱるはあまり良い印象ではない。メガドンキホーテも含めたさんぱる全体がイメージアップを図って施設を改革する努力が必要となる。

提案者 (所属) MP 実習 1 班 / (氏名) 瀬島由実加

プロジェクト名称	常磐線すくすくエリア計画-放課後子ども教室の設置(重点整備計画)
現状(問題点,背景)	土浦市内を走る常磐線は、2015 年春に東京駅まで乗り入れることが決定している。これにより、常磐線沿線はよりベッドタウンとしての人気が高まるエリアとなることが予想される。
目的・趣旨	常磐線沿線をベッドタウンとしてより魅力アップさせるために、「子育て」をキーワードとして特色付けたい。そこで、地域ぐるみで子どもを教育するための仕組みを荒川沖・神立エリアに導入する。沿線の人口を増加させることを最終目的とする。
内容	放課後こども教室とは、文部科学省が平成 19 年度より取り組んでいる事業。小学校の余裕教室等を活用して、地域住民の参画を得て、子どもたちとともに学習やスポーツ・文化活動等の取組を支援するというもの。具体的な活動内容は地域によって様々で、各地域で決める。また事業の主な実施主体は市町村となっており、国は各地域での取り組みに対し支援(予算補助)を行う。この放課後子ども教室を五中地区のすべての小学校で実施する。地元住民のボランティアを募り、勉強を始めさまざまなことを子どもたちに教える場、地域住民と交流する場とする。 神立に関しては、神立商工振興会 土浦市放課後子ども教室推進事業実施要綱に則り、実施日は週 2 回、実施日の放課後～午後 5 時までを実施時間とする。
将来目標	子育てに適したエリアであることの認知度を高め、人口の増加を目標とする。
期間	平成 26 年 4 月～9 月:プラン詳細検討 10 月～12 月:設営作業 平成 27 年 1 月～3 月:試験的に営業 4 月～:正式に営業開始
場所	荒川沖・神立エリアの各小学校施設
対象者	小学生
運営主体	土浦市教育委員会
運営方法	適当な子育て支援団体に運営を委託する

9-2-4 チャレンジ

企画書

土浦市マスタープラン策定実習資料

提案者 (所属) MP 実習 1 班 / (氏名) 富田真紀

プロジェクト名称	新・神立駅チャレンジショップ
現状(問題点,背景)	神立は土浦市の北部に位置し、工業団地が立地していることから土浦市の工業の拠点とも言える。また、神立周辺の商店や企業は「神立商工振興会」に所属しており、3年前に若返りを図って多くのメンバーを代替わりさせている。若返ったメンバーは「神立から！元気発信!!」をスローガンに掲げ、神立のハザードマップを兼ね備えた、神立の魅力を発信する冊子「神立手帖」を発行したり、神立の歌を作ったり、神立手帖をホームページ化したり、独自のイベントを多々開催するなど地域活性化のために新しい取り組みを行ってきた。しかし神立駅周辺は商店街も含めて閑散としており、街全体も活気があるとは言い難い。そして現在、神立駅周辺の土地区画整理事業や神立駅の再建が予定されている。神立商工振興会の会長の君山様にヒアリングを行ったところ、「イベントをするだけでなくイベントに来てくれた人をどうやって次に繋げるかが大切だ」と仰っていた。
目的・趣旨	現在の神立駅は閑散としており振興会の方々も神立に活気をもたらしようとしているが、実現できていない状況である。新駅舎や土地区画整理により神立駅周辺は変わるが、今のままでは活気は生まれるとは考え難い。しかし、神立商工振興会の方々は様々な工夫を凝らし、地域活性化事業に取り組んでいる。そこで、神立商工振興会の方針ややり方はそのまま、新しい提案をすることで神立を活性化させる。
内容	新神立駅に広場建設が予定されている。その広場に神立マップを置き、チャレンジショップを展開し、イベントを行うことで、集客を狙う。また、イベントの際にクーポン等を配布することで「また神立に来たい」と思わせる仕組みをつくる。  秋の季節料理 いなほ みるさとを思いながら静かに酒を味わう TEL: XXX-XXXX-XXXX 有限会社 今井屋本店 創業から50年！おいしいお肉が自慢！ TEL: XXX-XXXX-XXXX たかはし商店 どんどん焼 あんこたっぷり、名物どんどん焼！ TEL: XXX-XXXX-XXXX 神立マップ 活気と和みのある街、神立。 ◆新神立駅チャレンジショップ計画 神立駅舎を橋上化した自由通路を設けるにあたって、駅舎内または駅の外に「チャレンジショップ」を設けることを提案する。神立商工振興会店や経営の仕方について意見を出し、アドバイスする。 ◎具体的な手段 チャレンジショップを3区画設け、互いに売上を競わせる。売上が良いければより長く出店し続けることが

	できることとする。また、3 区画の店舗の店長と神立商工振興会の方々が集まり、それぞれの店舗について意見を出し合う意見交換会を開催する。それによって客観的に見た自分の店の長所、短所が分かり、今後自分の店を持つときや神立駅前の活気にも繋がる。また、季節ごとに季節に合わせた物作り体験教室や地域の人やサークルによるフリーマーケットなどができる空間とする。 ※チャレンジショップとは… チャレンジショップとはもともと商店街などの空き店舗対策に行われているものであり、期間を決めて安い料金を店舗を借り、店舗を運営することができる、という制度である。店舗を借りる側としては、低いコストで自分の店が出せる、経営のノウハウを学べる(地域によっては行政が指導している場合もある)、経験が積める、などの様々なメリットがある。 以前、土浦駅周辺でチャレンジショップを行ったが、成功とは言えなかったという事例がある。しかし、土浦駅周辺で行っていたチャレンジショップは土浦駅から少し離れており、神立駅前広場に比べると立地条件が悪かった。また、常磐線は 2015 年に東京駅に乗り入れすることが決まっているので、現在と比べて常磐線利用者が増えることが見込まれる。また、神立商工振興会が全面的にサポートしてくれるので、より地域に根ざしたショップを運営することができると思われる。 ◎参考事例 鳥取県鳥取市は昭和 60 年から平成 14 年の 17 年間で小売業年間販売額が 34%減少しており、商店街の空き店舗率は 6.8%、高齢化率は 27.9%となっている。 平成 12 年に鳥取商工会議所がタウンマネージメント機関に認定され、3 つのチャレンジショップのうち 1 つを、残りの 2 つは地元の商店街振興組合がそれぞれ運営している。 このチャレンジショップ出店者の 6 割以上が独立して新規開業に繋がっている。
将来目標	神立地区、特に神立駅周辺に活気をもたらすことを将来目標とする。
期間	第一行程:チャレンジショップ計画の詰め、支援内容作成 平成 26 年～ 第二行程:チャレンジショップ開店、商店の支援 平成 31 年度(駅完成後)～
場所	神立駅及びその周辺の地域
対象者	神立の住民、及び土浦市内の人々(チャレンジショップ)
運営主体	土浦市、及び神立商工振興会
運営方法	金銭面は土浦市の財源から支援する。 神立商工振興会はチャレンジショップを運営している人に対して経営のアドバイスなど実質的な運営面をサポートする(あくまで運営するのはチャレンジショップ経営者である)。
イニシャルコスト	店舗準備費用、初期広告費用
資金源	市予算
ランニングコスト	光熱費(運営側負担が多い)、家賃、改装費
資金源	市予算、及び店舗を借りる人
今後の課題	チャレンジショップは店を出す人がいてこそ成り立つものであるため、地域の人々の考えや意見を聴くことが重要であると思われる。

9-2-5 医療

企画書

土浦市マスタープラン策定実習資料

提案者 (所属) MP 実習 1 班 / (氏名) 井下純貴

プロジェクト名称	医療都市・医療交流サロン
現状(問題点,背景)	おおつ野地区は土浦ニュータウンとして商業・業務施設、都市公園を有した職住近接を目指した市街地である。しかし、工業地域への工場誘致は難航していて構想実現には程遠い状態にある。現在中心市街地にある土浦協同病院がおおつ野地区へ移転することが決まっている(平成 27 年 6 月完成予定)。おおつ野地区への公共交通は土浦駅からのバスのみとなっている。 現在、土浦協同病院付属看護専門学校は神立駅から 2.5km ほどの場所に位置しており、中心市街地の病院や医療施設を実習施設として利用しているが立地的に便利とは言えない。
目的・趣旨	医療施設を集積させて医療福祉に特化させたまちを目指す。また、医療研究・教育においても先進的な場所とすることを目的とする。土浦市に留まらず県南地域の医療拠点となることを目指す。施設間での連携が円滑になり医療発展とともに医療サービス向上を図る。
内容	内容 1: おおつ野地区の工場誘致予定地に医療施設を誘致する。 ○土浦協同病院付属看護専門学校の移転 協同病院と一緒に移転させることで実習施設を近接させて医療教育の充実した環境を得る ○医療関連施設の誘致 協同病院移転予定地の周りにアニマルセラピー施設、リハビリセンター、新薬開発や福祉ロボット研究所などを誘致して医療サービスを充実させる。また、おおつ野地区のすぐ南にある上大津東小学校でアニマルセラピーに活かせる学校飼育が容易な熱帯魚や金魚の飼育を行ってもらい、施設で活用する。 内容 2: 医療交流サロンを病院内に併設する。 ○一般公開医療講座 新人医師や専門学校の学生が実習を兼ねた公開講座を一般に向けて行う。医療サービスを提供する側だけでなく、受ける側にも医療について学んでもらう場とする。 ○情報共有 & 憩いの場 講座を聴きに来た人、病院利用者・関係者など誰もがくつろいで会話を楽しんだりできる空間とし、病院利用者や市民は気軽に意見や要望を医療従事者に伝えることができる。また、協同病院周辺の医療系の施設の情報の掲示も行う
将来目標	医療サービスを提供する側だけでなく、医療サービスを受ける側も医療について理解や関心の深い地域となることを目標とする。
期間	平成 25 年～ 誘致開始 平成 27 年 6 月以降～ 運営開始(協同病院と同時期)
場所	おおつ野地区
対象者	土浦市民、病院利用者

運営主体	医療交流サロン: JA 茨城厚生連、協同病院
運営方法	医療交流サロン: 協同病院と協同病院付属看護専門学校が管理
イニシャルコスト	移転費用、交流サロン準備費用
資金源	JA 茨城厚生連、民間
ランニングコスト	運営維持費
資金源	土浦協同病院
今後の課題	施設を移転してくると費用がかなり必要。移転跡の利用方法や機能はどうか。

9-2-6 にぎわい

企画書

土浦市マスタープラン策定実習資料

提案者 (所属) MP 実習 1 班 / (氏名) 石村匠

プロジェクト名称	土浦まんなか復活計画-まちなか交流ステーションほっと One+ (重点整備計画)
現状(問題点,背景)	土浦駅西口と2階部分がペデストリアンによって繋がれているウララからは既にイトーヨーカドーが撤退し、平成27年に土浦市役所の移転が決定している。これによって商業の拠点から行政の拠点へと機能が移行していくことが予測される。 現在、土浦市にはまちづくりの拠点が存在せず、似たようなスペースとしてはモール505内の「まちなか交流ステーションほっと One」のみである。このスペースは土浦市の観光・イベント情報の発信スポットだが、モール505には人が流れていけないため利用が少ない印象である。
目的・趣旨	市役所の玄関口にまちづくりの拠点としてのスペースを設けることで土浦市のまちづくりのヴィジョンを土浦市民に情報発信する場、また市民の持つまちに対する要望などを意見できるスペースを目指す。土浦市民のまちづくりへの関心を深めるとともに市民の気軽な交流の拠点、外部からの観光客に対して観光・イベント情報を提供。
内容	まちなか交流ステーションほっと One+ (約250㎡)の開設。 現在、モール505内にあるまちなか交流ステーションほっと One をペデストリアンデッキに面した市役所玄関口に新たな機能を持たせ「まちなか交流ステーションほっと One+」として開設する。 〈施設内容〉 ・ 観光案内 ・ ギャラリー(地域模型などを展示、多目的なスペースとする) ・ オフィス(常駐スタッフ) ・ カフェ(委託) ・ オープンテラス ・ ガーデン 運営は土浦商工会議所、土浦市、筑波大学の3つの団体共同で行う。土浦商工会議所が代表を務める現在のまちなか交流スペースほっと One のスタッフを常駐スタッフとし、土浦市は商工会議所への資金補助を行う。筑波大学は活動内容を3つの団体が共同で企画する定期的なワークショップや講師陣に大学教授等を迎えて行うまちづくりスクールを開催に関わる。これらの活動によって積極的に市民がまちづくりについて考える機会を設ける。さらにまちづくりスクールを筑波大学の授業と連携させることで学生が参加し、活発な活動となる事を狙う。 ワークショップ例) 駅前ガーデンワークショップ 駅前ガーデンを利用して花やハーブ、フルーツなどを土の入れ替えなどを含めて体験、勉強できるワークショップ。 その他) 観光の視点からのまちづくりワークショップなど

将来目標	まちなか交流ステーションほっと One+をまちづくり、観光・イベント情報発信の拠点に土浦市民1人1人が「将来の土浦市はこうなってほしい」というまちづくりのヴィジョンを持ち、土浦市民、土浦を想う人全員でまちづくりを進めていくことを目標に掲げる。
期間	第一工程：運営方法の検討と決定　～平成27年市役所移転 第二行程：まちなか交流ステーションほっと One+の開始　平成27年市役所移転完了～
場所	ペデストリアンデッキに面した市役所玄関口に約250㎡のまちなか交流ステーションほっと One+を開設する。
対象者	土浦市民、外部からの観光客
運営主体	土浦市、土浦商工会議所（現まちなか交流ステーションほっと One の代表）、筑波大学 3 つの構成団体によって共同運営する。 協力団体：NPO 法人まちづくり活性化土浦、土浦市まちづくり市民会議
運営方法	ワークショップやまちづくりスクールの内容は 3 つの構成団体により決定する。 主な常駐スタッフは土浦商工会議所が代表を務める現まちなか交流ステーションほっと One のスタッフとし、まちづくりの専門知識をつけてもらい利用者に対応してもらう。また筑波大学都市計画の学生をアルバイトとして雇うことも考える。
イニシャルコスト	改装費用　約 700 万円
資金源	市予算
ランニングコスト	事務費・機材費・人件費
資金源	土浦商工会議所（土浦市から一部補助）

プロジェクト名称	土浦まんなか復活大作戦-新商業施設・新図書館・公園の計画(重点整備計画)
現状(問題点,背景)	土浦市の郊外への「イオンモール土浦」をはじめとする大規模ショッピングセンターの出現などによって中心市街地の商業は衰退している。ウララからイトーヨーカドーが撤退し、平成 27 年に市役所移転がすでに決まっている。中心市街地がより行政として機能が強まると予想されるが、中心市街地の商業の衰退はさらに加速していくと考えられる。中心市街地の賑わいを創出するためにもモール 505 に関する課題をクリアする必要がある。現在、モール505のほとんどが空き店舗となりシャッターがしまっている店舗が多い状態である。土浦駅西口から非常に近く立地場所としては良好であるが人を誘導する仕掛けが全く存在しない。また土浦駅西口周辺は交通量が多く、建築物も立て込んでおりオープンスペースがほとんどないという現状もある。 現在進行中の土浦駅前北地区再開発では駅前市営駐車場に図書館を計画している。
目的・趣旨	中心市街地を商業の拠点として再び開発を行う。またオープンスペースや防災上の効果を考え公園も計画する。 モール 505 に新図書館の計画を行い地域住民が集まる施設に新しく生まれかわらせる。 土浦駅西口を中心市街地として賑わいのある場所とすることを目標とする。
内容	<u>内容 1: 交流スペースを持つ商業施設の計画</u> 現在、土浦駅西口の図書館建設予定地に新たに6階建て(1,2階は駐車場)の商業施設を計画する。土浦駅からの動線を確保するためペDESTリアンデッキをこの施設の 3 階につなぐ。またこの施設には様々な広さの「交流スペース」を各店舗階にランダムに配置する。 ・ 交流スペース このスペースは市民のコミュニティ活動・地元アーティストの講演・キッチンスタジオなど様々な目的に活用できるものである。買い物をする方にはコミュニティ活動を知り、参加するきっかけを創り出す。さらに普段このような商業施設で買い物をしない方が活動を目的に足を運ぶようになり、そこで買い物をするきっかけを創り出すといった相乗効果を狙う。このスペースを施設に入れ込む事で、主婦や高齢者など年齢にかかわらず交流する機会を設けることができる。この施設に行けば話し相手がいるという状況をつくりだす。 <u>内容 2: 新図書館の計画</u> 現在のモール 505 の敷地は土浦駅から徒歩で約 15 分と奥まった場所にある。さらに高架によって薄暗い雰囲気となっている。この敷地に一定の利用者が確保できる図書館を高架下のスペースを埋めるように計画する。この新図書館は実際に計画中の図書館の図書スペース約 6000 m²を確保した施設とする。新図書館は大きな吹き抜けを持った 2 階建ての施設とし、高校生などが利用できる勉強スペース、予約制で利用できる会議スペースなどを確保する。 <u>内容 3: 公園の計画</u> 現在モール505の東側にある駐車場にオープンスペースとして公園を計画。緊急災害時に対応できるように「かまどベンチ・ベンチトイレ(災害時にかまど・トイレになるベンチ)」などを設ける。また公園にはカフェや

	小規模なショッップを展開する。さらに、現在まちなか交流ステーションが担うサイクルステーションを独立させて配置。更衣室・シャワールームなど設備を充実させて展開させる。
将来目標	中心市街地に商業の拠点としての機能を再び取り戻すとともに教育の拠点としても整備し、土浦駅西口の賑わいを創出する。
期間	第一工程：事業計画の決定、工事終了 ～平成 29 年 第二行程：各施設利用開始 平成 30 年
場所	土浦駅西口周辺
対象者	全利用者
運営主体	土浦市
運営方法	
イニシャルコスト	新図書館建設費用：約 18 億円、新商業施設建設費用：約 8 億 9 千万円、公園整備費用：約 3 千万円（防災設備費用 1 千 500 万円を含む）
資金源	市予算
ランニングコスト	人件費、設備管理費など
資金源	各施設主体

企画書

土浦市マスタープラン策定実習資料

提案者 (所属) MP 実習 1 班 / (氏名) 富田真紀

プロジェクト名称	ビビッと魅力発信！(重点整備計画)
現状(問題点,背景)	土浦市では現在、様々なツールを利用してまちの広報活動を行っている。従来からのツールである広報つちうらや web ホームページ、ラジオ、また twitter のような SNS を利用した広報活動にも力を入れている。しかし、広報つちうらの購読率は若い世代ほど低い値であり(土浦市満足度調査より)、また観光情報などの効率的な PR のためにも、より広報の方法を工夫する必要がある。 また、現在土浦市外の人々に土浦市の魅力をアピールする機会が花火競技会などのイベント時のみとなっており、市外の人に対する土浦市の広報が弱い。
目的・趣旨	土浦市全域で一体となった広報活動を行い、また土浦市外の人々に土浦市の現状や魅力を知ってもらうことで、土浦市に住みたいと思う人や観光客を増やす。
内容	【提案1】◎クーポン配布 広報つちうらやホームページ、twitter、それぞれの広報ツールに土浦全域で使える共通クーポンを載せる。各ツール別に以下の方法を採用。広報つちうら→最後のページにクロスワードなどのクイズ(土浦市に関連する内容)を載せ、それを解いた人のみ使えるクーポンを載せるホームページ→広報つちうらと同様のクイズを記載し、解いた人のみクーポンが現れる仕組みにする。Twitter→フォローした人はフォロー画面を見せるとクーポン代わりにクーポンの内容は、各店舗・施設により異なる。割引やその他おまけのサービスなど。広報つちうらとホームページに載せるクイズは、愛つちうら子育てプロジェクトの一環として土浦市内の子どもたちに作成を依頼する。【提案2】◎土浦写真コンテスト現在土浦市観光協会が行っている「土浦の写真コンテスト」について、少々形態を変えることでより親しみやすいものにする。応募方法:現在は土浦市観光協会もしくは「小町の館」まで作品を持参しなければならないが、これをインターネット経由で応募できるようにすることで、より手軽に応募することができるようになり、参加者を増やす。公開の方法:1日1回日替わりで、応募されてきた写真の中から一枚を土浦市観光協会や土浦市の公式ホームページに公開する。また、今までの写真を全てインターネット上に公開することで、土浦市のきれいな景色を土浦市の人々にも見せることができ、土浦市の魅力アピールに繋がる。【提案3】◎「わがまち CM コンテスト」に応募。総務省関東総合通信局、関東 ICT 推進 NPO 連絡協議会主催の「わがまち CM コンテスト」に毎年応募する。応募するにあたって、土浦市民がより土浦の良いところを知ることができ、市民同士の結託も強くなることを狙う。そして、コンテストで賞を受賞すると土浦市外の人々への土浦の魅力アピールにもなる。土浦商工会や土浦市役所など市の機関や民間の機関が中心となり市民に呼びかけ、CM 作成、編集、応募を行う。

将来目標	SNSと連動しクーポンを配布することで広報つちうらを購読していない世代にも土浦市について知ってもらい、またわがまち CM コンテストや写真コンテストで土浦市内だけでなく市外の人々にも土浦の良さを知ってもらい、観光客や住民を増やし、人口を現状維持する。
期間	クーポン:2014 年～ 写真コンテスト:2014 年～ わがまち CM コンテスト:2014 年～
場所	土浦市全域、全国
対象者	市内外のすべての人
運営主体	土浦市
運営方法	土浦市役所、土浦市観光協会、クーポン協賛店
イニシャルコスト	ホームページ作成依頼費、広報つちうら作成費、CM 作成費
資金源	土浦市
ランニングコスト	広報つちうら印刷費、動画作成にあたっての諸費用
資金源	土浦市
今後の課題	SNS と連動しクーポンを配布するにあたって、商店と市の連携が必要となる。またインターネットを活用する政策が多いので、講座等を開催しインターネットに親しみのない人もコンテンツを使えるようにする。